

五年目を迎える



共済会 その活動



共済主義の組織体——共済会

五年前の十一月、大学を出てまもない若者が五人、社会の色々なことについて話し合っていました。公害問題、人間性喪失の社会、

荒廃しつつある教育など話し合う内に、「我々は、この状態に手をこまねいて見ているだけではないか。何とかしよう」と考え、今まで各人が別々に貯金していたのを一つにまとめ、それを社会の建設的活動の基金にしようと考えました。それから更に、ただ貯金を集めただけではさ程の額にもならないし、目的を持って資金をつくるというのであれば、もっと積極的に自分達の生活の中にある無駄を省くとともに、自分の『物』、自分の『金』という『私有観念』を根本的に改めようではないか……ということになりました。

それは、物も金もすべて大自然の中のひとつであって、人間に許されるのは『その物なり、金なりを有効に使ったり、管理すること』だけではないかという考えから、自分の手元にお金があっても、何等かの意味で社会的に意味のある使い方をするため、無駄をさけ、残ったお金はもつと大きな視野から社会に還元するために、一つの基金にまとめて、そこで大いに使うということです。

また、人間は、生まれた時は、金も物も、地位も名誉もない裸の人間です。そこで頼れるものは人間（他人・親）だけです。私有観念を改め、お金や物に捉れない気持ちになった時、すべての価値は『人間』に置かれ、人間のつながりの中から温かいものを感じ、喜びを見出し、そして、お金でも物でも得られない豊かな気持ちを身につけることができるのではないだろうか……ということになったのです。

彼らは、この考え方を『共済主義』と名付け、組織体として『共済主義』をつくりました。わずか数ヶ月で、この考えに賛同し、参加した者が数十名にもふくれ上りました。最初、彼らは、各人の収入の全てを『共済会』に供託し、本人が必要であると判断した額だけを随時、会から引き出すように決めました。一方、誰にでも共通な費用は、会が個人に変わって自動的に支払うようになりました。しかし、全収入を会に入れることにより、

なんでもかんでも会に頼ることになってしま
い、また必要ならば、入れた以上の額を引き
出しても良いということが強調されたため、
必要の基準や限度、全体の共済会の状況など
を考えもせず、個人が好きなことをするよ
うな傾向ができてしまいました。そして、せ
つかく集まった基金がまたたくまになくなっ
てしまったのです。

そこで、価値観ということが大きな問題に
なってきた。自分は必要だと思いが、他
人から見た場合にも、同じく必要性を認めら
れるか……ということ。そして、もう一
度ははっきり自覚と意識を認識した者だけが中
心になって、今までの個人個人の参加から、
いくつかの班を組織し、それが一単位となっ
て、共済会に加入することになりました。そ
して、一週間ずつ予算を立てて、それを提出
するなど、会計の手間を省き、個人の判断を
グループの判断に高めました。今までは、
自分の欲望と、全体のバランスをよく考えな
い面があったのを、班を単位とすることに
よ、一人で考えるだけでなく、みんなに聞い
てもらって判断し、全体の意識を高めようと
考えたのです。しかしそれでも、全収入を会
に入れることは、やはり人によって理解に違

いがある上、欲望や必要度に基準や制限がな
いため、問題は解決しませんでした。

それから、共済会の方向は、もう一つ大き
く変わって、個人は、個人の収入の範囲内で
生活することを前提として、無駄を省いて余
ったお金だけを、共済会に入れる方向に変わ
りました。今までのような、共済会に収入の
全部を入れ、共済会にベッタリ依存した形を
改め、まず個人が、共済主義の精神に基づい
て個人の収入内で生活し、その余力を持って
共済会を大きくし、社会に貢献する形を取っ
たわけです。しかし、共済会が個人の不慮の

共済主義の実践・その一 返済義務のない奨学金

会員の学生に対して、奨学金が与えられる
ことになりました。それも、普通の返済義務
付きの奨学金ではなく、自分がやがて一人立
ちした時、進んで社会に還元すれば良いもの
です。共済会に入っても、また別の形で社会
へ還元してもいいのです。これは、一人の人
間が自分の能力を伸ばして社会に貢献する意
義が大きく、また個人的なものでなく、社会
の多くの人からの援助であれば、己れ一人の
ためだけでなく生きていこうとする人が多く

出来ごとのために、保障することには変わり
なく、安心して余ったお金を共済会に入れる
ことができました。

ここから、はじめは、自分が共済会から何
を得られるか、自分中心に考えていた人々が
独立的になり、更に積極的に共済会を盛り立
て、自分が他の多くの人々、社会に対して何
を為すべきかを、考えるようになりました。

このようにして、共済会に集められた基金
は、やがて共済主義の実践として還元される
ようになったのです。

――奨学金を受けた学生の話から――

「私の場合、事情があつて親の仕送りが止
まったのです。まだ学生だったのですが、こ
れでは学校をやめて勤めようかと思つたので
す。しかし、回りの人が非常に心配してくれ、
共済会があるから安心して卒業するまで頑張
りなさいと、力づけ援助してくれました。物
質面の援助だけでなく、むしろ精神的負担を
感じさせないように心くばってくれて、安心
して卒業できました。」

「僕も同じような経験を持っています。僕
の場合は家から独立して生活しようと考えて
いたんです。しかし学生でしたから、大学だ
けはでたいと思ひ、アルバイトをやることに
していました。その時、学生は勉強にはけむ

共済主義の実践・その二

共済主義による結婚

――共済会では、結婚についても援助しまし
た。会員同志で、共済会による結婚式をあけ
た若狭通夫氏（35）の話から――

「世の中、経済の高度成長と国民所得の向
上につれて人間の精神的な価値が次第に失な
われてきておりますが、結婚式という形にお
いても、当事者の見栄と虚栄を基準にして執

ことが本分だし、もしアルバイトをやる時間
があれば、もっと社会的に役立つ活動にその
時間をふり向けたらどうだ、と教えられまし
た。そのかわり、共済会から生活費を考慮し
ていただくようになりました。すでに共同生
活をしていたので、生活はさ程苦しいことは
なく、勉強に専念しながら、やっぱり安心し
て卒業できました。僕は共済会から生活費を
出してもらっていたけれど、それに対しては、
何のうしろめたい気持ちもありませんでした。
というのは、それをもらっただけの自分になっ
て、将来きつと大きく社会に返すだけの自分
になろうと決意したし、自信もあつたからで
す。共済主義の精神も、そこにあると確信し
ています。」

り行われているように見えます。
従って、私達は先ず第一に旧来の意味のな
い慣習を改め、無駄を省くと共に、形式的で
ない、秘莊嚴な結婚式をしようという考え
方に立つて進めました。花嫁衣裳も時代遅れ
の文金高島田を止め、不必要な角隠しやカツ
ラを廃して、借物でなく、花嫁に相応しい服

装で式に臨みました。

もちろん、旧弊打破の精神によって、費用
の点においてもかなり節約できたことも事実
ですが、本来、節約や省略が目的ではなく、
必要、不必要を見極めることが判断の基準で
ありましたので、捨てるものも多くありまし
たが、同時に得るものもそれ以上に多くあり
ました。

披露においても、多くの会員の方々の祝福
と協力のもとに、皆さんが我がことのように
準備に当たって下さり、会場の手配から、心
こもった手造りの料理、そして雰囲気盛り
上げる余興に至るまで、真心がすべてにわた
って工夫となって現われ、感謝の気持ちが自
然に湧いてくるのでした。

ある方は「私は金のかかった披露宴には何
度も出席したことがある。しかし、多くの場
合、披露の場を宣伝の場とは違っている向
きが多い。それに比べ、本人を直接知ってい
る者が百名近く集まり、これ程豪華な、そし
て皆の祝福する気持ちにヒシヒシと感じられ
た披露宴は初めてである。」と感激なさって
いました。

共済会として初めてのことでありながら、成
功のうちに終えることができたのも、これが

単に経済面での助け合いだけではなく、共済主義の自他共存共栄の精神によって、貫かれていたことによるものと思っております。結婚が人生の新たな出発とするなら、今回

共済主義の実践・その二

都市での共同生活

共済会では、五十名近くの人間が、渋谷、世田谷など東京区内に、マンション、一軒家、下宿などで共同生活しています。その内の一人、斉藤久美子さん(25)の話から。

「私達は、民家の二階を女性三人で間借りしている。一人は美容師(28)、一人は電話交換手(25)、一人は事務員(21)。生活費は、必要と量に応じて分担し合っているが、金銭的なことよりも日常生活の面で、ずいぶんスになったと思っている。相手の立場を考慮するようになったから。

こんな事がある。誰かが病気で寝込んだ時には、食事の仕度、洗濯、薬、体の調子などそれぞれ思いやって世話してくれる。寝た者にしてみれば、ちよつと動けばできる事なので起きたくもなるけれど、私達は、病気の時は寝るに徹するのが原則である。無理をして勤めに出たところで、周囲に心配や迷惑をか

の経験を生かして、より高い共済主義の精神を身につけ、ことに対処していきたいと思っております。」

けるし、自分も休まないことになるから、二日三日休んでも、ちゃんと健康になってまたしっかり働けるようになることが先決という事になっている。

共済主義としても、人間としても、当然のことなのだろうけど、私は自分の意識がずい分と変わったように思う。以前の私なら、ひとの世話にしても、ひとの世話にはならなかったから。今は素直に「ありがとう」を言える。

他人と一緒に生活自体、初めての経験なのだけれど、他人を自分の家族同様に、心配事や嬉しいことを語り合ったり、ハブニングがあったり、とことん喧嘩して共に過ごすうちに、親子でもなく姉妹でもない、親しい間柄ができてきた。そんな楽しい生活がここにはある。

それにしても、共同生活を通して自分を大

切にし、他人を大切にしているうちに、本当の家族に対しても、大切にする気持ちも持てるようになった自分を見出したことは、大発見だと思っている。」

この共同生活は、長い所では五年近くも続いています。家賃や家財道具の無駄が省け、精神面では、時にはぶつかりあったり、問題も生じるが、それを乗り越える事によってそれ以上にプラス面が多いそうです。一般的には、自分の時間が持てないとか、人のすることが気にかかって仕方がないとかで共同生活を嫌がる人がいるわけですが、渋谷のマンションで、十一名の女性で共同生活をしている一人、小宮弘子さんは次のように言う。

「人間は、人」という字のごとく、お互いに支え合って生きていく生物ですよ。だから相手を手助けし、自分も伸びる。そしてお互いに助け合い、生かし合う社会を作りたい、というところからまず志を同じくする私達が見本を示し、体で実践し、身につけるために今の共同生活をしているんです。」

共済主義の実践・その四

外部への働きかけ

共済会では、『共済主義』というパンフレットを発行している。(昭和四十八年四月発行、現在まで四号発行)これは外部へのPRとして、共済主義の説明や実践を記事にして、一万部をマスコミ、学校、著作家などに送っています。

この中で、毎回、共済主義としての主張として国鉄問題(二号)、教育問題(三号)、自己中心の歩きタバコと自国中心の日中復交(四号)などを取り上げている。その二つ『歩きタバコ』の記事を見ると。

電車がプラットホームに入ってくる。人々は一斉に右手を口元へ運ぶ。口にくわえたタバコを指でつまむ。足元へ投げ捨てる。足でもみ消す。そして電車が去った後は……ホームは吸殻で真白だ。

外に出てみよう。汚ない。自宅の庭を毎朝掃き、打ち水する人達が道路に平気で吸殻を捨てていく。通行人に聞いてみた。

「道が汚ないと思ったことがありますか?」「さあ、あまり感じませんでした。」

「何のゴミが多いと思いますか?」「気をつけたことがないんです。」

我々はどうやら、ゴミ不感性にかかっているようだ。この道路上のゴミであるが、ほとんどがタバコ関係であることに気づく。吸殻、空箱、マッチの燃えさしが散らばっている。

公害企業を追求し、企業の社会的責任を語る。正しいことである。が、全く同じ人間が会社の行き帰りに歩きながらタバコを喫い、平気で道を汚していく。そこでマッチや吸殻を路上に捨てた者には注意してみたが、皆、それまで罪悪感なしに道を汚していたことがわかった。

そこなのではないだろうか。気づいた者が先ず実践し、気づかない者に呼びかける。その輪が広がっていくことによって、社会が明るくなる。「おせっかいだ」と言う者がいるかも知れない。しかし、おせっかいな人間が

出ない限りこの世の中は良くなる。

そこで、共済主義実践運動では、自分さえ安泰であればよしとして無責任に周囲の動きを見逃したり、聞き逃したりしない。また、己れ一人の利益に終わることよりも、多くの人の利益に通ずる行動を優先しようではないか、と呼びかけ、且つ、実践しているのである。

彼らは主張を実践し、またパンフレットを活用して外部へ働きかけている。『国鉄問題はこうすれば解決する』という二号のパンフレットを国鉄本社、国労、動労などに持っていき面談するなどの行動を起こしている。

また、外部団体の『人間性復活運動』や『仏道蘇生運動』などの社会的な運動の資金的裏付けをしており、会員自身もそれらの運動に参加、援助をしている。

今年の六月十日には、銀座の歩行者天国で『青空対話集会』を開き、広く一般にPRした。

今後の共済会は?

作田会長に聞く

会員は月一度集まって、『物価問題』、『物

を大切にノ』などをテーマにして勉強会を開

き、物の価値を考え、無駄を省く努力をして
いる。

会員数は、東京を中心として五百名となり、
北海道その他の支部もつくられている。資金も
五百万円とまとまり、共済主義の考え方に賛
同して入った会社も、新聞、不動産、製薬関
係など三つほどある。

会長の作田勉さん(30)に話を伺いました。

「共済会では、余力なお金を入れてもらっ
かわりに、個人の不慮の出来ごとのために保
障するそうですが、結婚資金や住宅資金、保
険にかかる費用なども、共済会に入れている
わけですか？」

「共済会のお金は社会に還元することを原
則としますので、普通、日常生活費には援助
しません。ですから、各人で自立できるだけ
の余裕は持ってもらいます。各種の保険など
も各自でやるようにしていますが、結婚につ
いては援助をしています。これも、ただ資金を
与えるということではなく、この前の例のよ
うに物心両面での援助を考えています。住宅
については今の所あまり考えてはいませんが、
若い人達は気にせず共済会に入れています。
年配の方は、身近なことでもあるので住宅
資金は入れています。しかし、将来として

は我々の共同住宅などを考えています。
また、店を経営しようとする人や、仕事が
順調にいつていない時などには、資金面や人
材面で援助をします。」

「共済主義の生まれたバックボーンは何で
すか？」

「共済主義の考え方は、私を含む五人の者
が始めたのですが、それぞれ心理学、宗教、
哲学、社会学などから来る考え方を持ってい
ました。しかし、それぞれ一長一短があるよ
うに思え、また、単に思想として終っている
ように感じていました。しかし、今の社会は
すべてが行き詰りに来ています。それを打破
する方策を語り合っているうちに、人間性の
向上に努めることを絶対条件とし、人類相互
の連帯と人間主義の展開をはかることによっ
て、理想社会の建設が可能であるとの結論に
達しました。そこで『共に産み出し』『共に
助け合い』『共に栄える』ことを柱に、思想
運動ではない精神運動、生活運動として共済
主義実践運動を始めたのです。」

「今までこの運動をやってきて、印象に残
っていることは何ですか？」

「最初、全収入を共済会に入れて失敗した
ことです。集ったお金を個人の判断で必要

なだけ取っていったわけですが、二百万円のお金
が二、三ヶ月でなくなっていました。何が
必要で、何が不要でないのかの判断が非
常に難しいものであり、また、その判断力
を培うことが大切であると痛感しました。」

「将来の計画としてはどんなものがあるの
ですか？」

「現在基金五百万円あり更に増えつつあり
ます。これを何かに活用するかを考えていま
す。会員の中に農業をやりたい者がいるので、
北海道に我々の農場をつくらうとか、本部と
して会館を建設しようかと考えています。ま
た、これはまだ理想ですが、完全給付の病院
や、本来の教育のあり方を探る学校の建設等
も考えられています。」

わずかに五人で始めたこの運動がここまで発
展していったのは、考え方の素朴さと行動力
にあると思いました。組織づくりができたの
は、やっと今年からだということですが、組
織ができて、資金も集って来た共済会の真価
はこれからだと感じました。

—— 畠中記 ——

村の山間を廃る

弥栄之郷で考える

土地を売らないで離農する人は決まって、
①植林した山林を建築材として売ったり、
②雑木林をバルブ材として売ったりする。

③水田は永久転作(地目を山林に)して、
杉苗を植えて出るのである。すなわち、山は
ハゲ山になってしまう。また元の青々とした
山になるには、早くても15年から20年はかか
るのである。我々に土地を売ってくれた勝田
さんの場合もその典型である。25ヘクタール
はあるという山林は、保安林をも含めてこと
ごとくバルブ材として売ってしまった。保安
林とは川の流域筋に山崩れや洪水を防止する
ために国の資金援助によって植林した地域で
ある。木を切ってしまうと、保安林は保安林
の役目を果さない。

ある日、その事について役場で聞いてみた
ことがある。役場のエライさんは「そうなん
ですよ」と認めながらも、「しかし、今の慣
例では伐採する保安林と同面積の山林をその
見返りに保安林指定とすれば良いということ
になっています。」という返事である。「なん
ともはや、お役所という所は……」と言いた
くなる。役場の職員にとっては、帳簿の上で
保安林面積があればよいのであって、それが
どういう役割を果しているかは二次的な問題

なのであろうか。材木はいまだに石(体積)
単位で測っている。だから1ヘクタールとい
っても一様ではない。太くて大きい、それに
バルブに適した木が多い所は当然買値も高
いが、人間の腕ほどじゃない小枝ばかりの雑
木林は、1ヘクタールや2ヘクタール売って
も、ほとんど収入と言えほどの収入がある
わけではない。

バルブの場合でも、買い手の方が売り手よ
りも強いという話を聞いた。ひどい場合は、
材木の運送費用、労賃、架線(山や谷向うか
ら木を切り出すのに鉄のロープと滑車を使う)
設備等々の必要経費をひいたその残りが木の
持主に入ってくるという。計算がまるで逆な
のである。我々が弥栄村に来て以来、バルブ
の車を見ない日はない程に、数台のトラック
が往来し、チェーンソー(動力ノコギリ)の音
は山々に響きわたっている。始めて村に来た
人は、この山間の部落に何か活気すら感じる
かもしれない。しかし、しばらくいると山に
緑がなくなり赤々とした山肌をみせた禿山が
その後に広がっているのを見て、淋しさを禁
じ得ないだろう。今まさにバルブが、バルブ
資本が、農村を破壊し、山間の村から農民を
追いたてているのである。

■根拠地建設に向けて■

―準備会への誘い―

折内 和喜

支配するものも支配されるものもない社会

すべての物質が共有化された社会

能力に応じて働き必要に応じて得られる社会

国境のない社会、人種差別の撤廃された社会

こうしたものが私の実現させてゆきたい理想の社会なのです。

〈共同体即理想社会ではない〉

共同体が即理想社会と思ひ込む諸君がいるならば、それは夢でも見ているのではないだ

わらないとは誰も断言できない。話し合いを拒否され、居直られてしまったら、対応の仕方がなくなってしまう。だから、私たちに話し合いに対する基本的な姿勢が必要になってくる。

それは、感覚的に拒否したり、めんどくささがたりすることではなく、いちずに話し合おうとすることであり、相手を中傷したり、論破してやろうと構えたりしないで、もっと自分をさらけ出して、素直な気持ちで臨むことだ。話してもしょうがないとか、解ってもらえないとかいってあきらめたり、縁を切るなどというようなことはしないで、意見がどこでどう合わないのかを、はっきり確認すればお互いの考え、存在、生き方がはっきりしてくる。

そうすれば、関係を煮つめてゆけると思う。人を見切ることは、社会変革の運動をしていたとしても、関係の変革もできないことを、自ら明らかにしている。簡単に人を見切るのではなく、関係の変革を、できるかぎり続けてゆくことだと思う。極端に言えば「一生つきあう気持ちでやる」ということ。

最後に、私たちは問題が生じた時、相手の悪いところを中傷したり、批判したりする一

ろつか。漬物の一夜漬でもあるまいし、そう簡単に私達の理想とする社会は来ない。現実における諸矛盾をなくしてゆくような現実的な運動をすることが、理想とする社会を創ることになるのではないか。その方法として共同体があるように私は思う。

共同体を批判する人の多くは、共同体が即理想社会と思ひ込んでいるのだから始末が悪い。私達が生活してゆく中で、こうではない、こうあつてはならないということがあつたとき、こうでいい、こうあつて欲しいという欲求が出て来ると思う。そうしたものが理想としての形となる。でも、現実には理想ではなく、あくまでも現実なんだ。それでは、現実を変革しうるものとして、どのような方法があるか。

議会制民主主義を採るか、暴力革命を採る

方通行のものではなく、自分の在り方をも含めた中で話し合いを進めてゆくことだと思ふ。話し合いをして、解らないところがあつた時互いに指摘しあつて、かくれた意識を引き出すことが、関係をいつそう深める。そうしない限り、問題の責任を誰かさんにかぶせて、ためえは逃げていくことだ。

〈生活次元からの運動〉

私たちは、理想とする社会に向けて最善の方法として共同体（根拠地）を志向する。

それは何故にか。共同生活の場は、ふつう自分だけの場に生活をもっている時より、はるかに問題が凝縮された形で生じてくる。それは、自己変革も関係変革も容易に成し得る可能性を秘めている。今までの変革が観念的な変革であつたとするなら、共同生活をしながら行う変革は実際の課題である。然らば私たちは、何故に共同生活しながら行う変革を重視するのだろうか。共同生活しなくても、いろいろな変革はできる。しかし、前にも述べたように、共同生活をした方が、より容易

か、世界連邦をとるか。いや、私は共同体を採る。なぜなら、ここにあげたものに生活を含めた運動があつただろうか。制度として、機構としてゆくのが関の山だつたと思う。共同体は生活を含めた運動であるがゆえに、自主性を疎外する上からの制度より、下からの革命を重視する。そして、最後に理想に向けて運動する時、最善の方法として共同体があるのであり、その中で生活価値感、人間関係の変革が絶えず行われているのである。

〈私たちに必要なこと〉

話し合いは私達の意志疎通を計る最善の方法といえる。しかし、それが最悪のものに変

に変革が成し得るからだ。

では、なぜ変革が必要なのか。なぜ共同体が必要なのか。同等の疑問でもあるので進めてゆきたい。

今の社会に対する関係とか、友だちに対する関係とかが現実にあると思う。またそれとは別に、私たちが望む関係があると思う。私たちはあらゆる権力、権威を否定する。その介在しない関係を望む。私たちは、私利私欲による利害関係ではなく、その介在しない関係を望む。それらを前提とした中でこそ、いろいろな変革がなされて行くのだと思う。それは共同体でも同じなのだ。

共同体は『理想社会』に思われたり、『閉鎖的になり、自己満足している奴等がいるだけさ』と言われたりする。しかし、私たちが創ろうとする共同体（根拠地）は、単なる内部だけの精神主義に埋没するのではなく、外の社会に対してはたらきかけも行ってゆく。私たちの社会を建設するために、今まであった自分の生活の場を捨てて、共同生活に入る必要があるのではないか。私たちの足もと、生活からの変革をおしすすめる、今の生活意識を変革しうる共同体（根拠地）運動を資本主義体制内に創り、それを崩壊させる胎児とな

ろう。

へいろいろな共同体を創ろう

一つの共同体だけでは、空間的に限界がある。それなら、一つの共同体ではなく、異なる共同体をひとつの地域に集めて、地域共同体を創ることが必要になってくる。

しかし、今のところ各個バラバラに運動しているのが現状なのだ。農業、漁業、林業の問題、身障者の問題、部落民の問題、公害の問題、山谷・釜ヶ崎の問題、その他などから各運動体が社会につきつけてゆくと、つきつけた運動自体の存在が弱くなると思う。なぜなら、社会はその問題を含んでいるだけではないからだ。ここにあげたものすべてを含んでいるからだ。それに今の社会では、専門バカが横行して、害をなしている。私たちの運動には、専門バカをつくってはいけぬ。

私たちのモットーとしたい『共に学び』『共に助け』『共にわかれ』『共に創る』などによって、専門領域を解体してゆこう。そうした時こそ、各運動体が専門領域にこだわらず、

連帯できて、私たちの地域共同体を創ることができよう。社会はいろいろな問題を含んでいるのであるから、私たちの社会にも、いろいろな共同体（根拠地）を創ろう。

〈準備会への誘い〉

私たちは、根拠地建設に向けて読者会を行っていましたが、その延長として準備会を開くことになりました。準備会で行ってゆこうとするのは、私たちの根拠地建設に向けて個々人の意見を参考にしながらおこない、また、参加する人との接点を煮つめてゆこうと思います。そうして、根拠地に対する考え方がはっきり確認された時、根拠地は建設される。準備会は、そのための前段階です。

来れ 無名なる戦士よ！

連絡先・東京都中野区南台5-13-8浅間方

折内 和喜

電話・三八四一九二六八

看護婦さん募集

ユニークな長崎共同生活体の医療部門・藤田外科医院で看護婦さんを募集しています。現在、院長のほか若い医師二名、看護婦六名、他に検査技師の学校に通っている男子一名がそのメンバー。従来の企業化された病院でなく、本来あるところのホスピタル（優遇する心）の意味を實現しようとしている。資格がなくとも学校に行く意志があれば可。お問い合わせは左へ。

長崎市小ヶ倉町一—六四〇

千八五〇

藤田外科医院

藤田満寿子

電話・〇九五八七八—五二〇一

あいさつ

一九六二年十二月、私設の日本キブツ協会を設け、翌年十二月からは月刊キブツを発行して、キブツ思想の普及に専念して参りましたが、五ヶ年後、漸く有力者多数の協力を得て、社団法人日本協同体協会の設立となり、宮部理事長の下に常務理事として、その実務を担当し、月刊キブツの主筆も十ヶ年、その間、キブツ研修を希望する青年男女を毎年イスラエルに送り、そ



昭和四十八年十二月

日本協同体協会

理事 手塚信吉

の数も三百六十余名に及んでおります。

キブツ思想やその形態は、新時代の社会生活原理として今後ますます普及徹底の必要を痛感しますが、私も本年満八十二才、実務の担当に無理がありますので、今回常務理事を奥村久雄氏に譲り、理事として引続き協力することになりましたから、御了承の上今後ともよろしく御願い申し上げます。

告知板

■共同体発表会

▽数ある伝統的な共同体の中から一燈園、山岸会、東山産業の代表が設立理念や生活実態を発表する。その他多数の共同体実践者と話し合うチャンスあり。

場所・東京都新宿区市谷船河原町十一、家の光協会講堂

電話二六〇—三二五一

日時・昭和四十八年十二月十六

日（日曜日）午後一時—

四時三十分まで

費用、会場費として一人一百円

■東京読者会よびかけ

▽読者と協会のつながりから、読者と読者のつながりを作ろう。

▽毎月第一土曜日午後六時から日本協同体協会で、第一回目を新年度一月五日に集まって、いろいろなことを話し合おう。

■金峰牧場

▽韓日キャンプ 一月十日より十七日まで。我々は韓国のことをあまりにも知らない。具体的な理解と協力の道を築くスタディキャンプ。

■弥栄之郷共同体

▽いま越冬準備に大わらわ。豚舎と新小屋の建設に連日連夜の突貫工事。大阪では『越冬備北に行く会』を企画中。

■共済主義実践運動本部

▽共に助け、共に作り、共に栄える、をモットーに自由、平等の地球国家を目指す運動。

▽毎月第二土曜日に集会をもつて、運動方針を話し合う。

※東京都渋谷区松濤一—七二二 電話四六〇—九四四四—五

■一燈園

▽智徳研修会 毎月7日、10日に行う実践研修。

※京都市東山区山科四の宮 電話〇七五—五八一—三三三六

協会日誌

9月5日 イスラエル大使公邸で、ガビシユ参事官のお別れパーティー開かれる。手塚さん、奥村さん出席。

9月10日 「野中の一軒屋」の人達がパンフを持って来訪。

9月12日 制作部にいた百瀬さんと、第十回研修生高須賀晃子さんの結婚式に、奥村さん長野までお祝いに行く。

9月12日〜14日 八回生の川村せつ子さん朝から手伝いに来てくれる。

9月24日 スーザン・コバードさん来訪。これから東山産業に行くとのこと。

9月29日 月刊キブツ十月号出来上り。発送業務を千葉君が手伝ってくれる。

10月1日 山岸会春日、北試から青年三名が来訪。約一ヶ月東

京案内所に駐在とのこと。
10月5日 キブツメンバーのアリエ・ベングリオン氏（イスラエルの初代総理大臣のおいっ子さん）と手塚さん、奥村さんが四ッ谷で対談。
10月6日 第四次中東戦争始まる。

10月8日 十月十三日出発予定の第十二回キブツ研修は延期と決定。朝から問い合わせの電話が鳴り響く。

10月9日 現地にいる研修生の父兄から心配の電話が続く。

10月11日 山岸会、厚木振出塾夜迷停を回り、新しい共同体根拠地を建設したいという折内君、原稿を持って来訪。

10月13日 中東戦争のなりゆきを心配して、元研修生や研修予定の人達が集まる。イスラエル現地と電話連絡、キブツ内には危機感なしとのこと。

10月16日 長野の山岸君、自家製のリングを一箱持って来てく

れる。味が一味違いました。
10月18日 イスラエルより戦争勃発後の第一報届く。昼より家の光会館で研修生家族会を開く。
10月21日 NETテレビにて第十回研修生、二道恵太郎君の現地での様子が放映される。

10月22日 イスラエルとエジプトが、十七日ぶりに停戦案を受諾。

10月23日 十八日の夜イスラエルを立つた、第十一回研修生クファル・マサリックグループの堀田君が帰国報告に来てくれる。

10月27日 新宿に第八回生ギネガールグループ集まる。待機中の第十二回生も参加して、キブツの話に花が咲く。

10月29日 草刈先生、岸田哲さん大成出版の方と来られる。来年の春に新しいキブツの本が出るとのこと。

11月1日 厚木振出塾の原さん来訪。キブツ行きが延期になった武村君、この日から毎日手伝

いに来てくれる。
11月3日 東京農大の収穫祭にキブツの展示、畠中がスライド上映に行く。

11月5日 第九回ネティブグループの奥田一子さん、フランスの共同体をまわって十月三十一日帰国、フランスの話を書く。
11月6日 第十二回グループ再編成の文書を送る。

11月8日 十二回生の仲間数人と世話係の青木さんが集まって水たき料理。行けなくてイライラしている人が多いとのこと。

11月12日 十二回キブツ研修生の参加人員十五名（含世話係）と決まる。エジプト、イスラエル停戦合意書調印なる。

11月14日 キブツ・ギネガールより、研修生受入準備OKの電報受信。

11月20日 キブツ研修生一行十五名は、羽田空港からエアフランス機で元氣いっぱいイスラエルに向けて飛び立った。

編集後記

▽過去の『月刊キブツ』を見て驚いた。よくも、これだけのことを少ない人員と少ない資金でやってこれたものだ！ それだけに今、来年から新聞形式となり内容が少なくなることに、申し訳ない気持と残念な思いがします。しかし協会で働いて見て、雑誌にのる情報は一部だと解りました。もっと紹介したいことがあっても、時期遅れでダメだったりすることが多いのです。それで来年から、これら情報で紹介と読者の結びつきを深める為、月一回は東京読者会を開いてゆきたいと思っています。これについての御意見、御希望をお待ちしております。マサオ▽月刊キブツが冊子の形で出るものとしては、これが最後のものとなった。本年三・四月合併号から本誌の編集にたずさわって来たが、ズブの素人であった

私は、特にはじめの頃は何もわからずガムシヤラだった。ある友は「内容が面白くなかった」と購読中止を伝えてきたし、またある友は「また次号をたのしみにしている」とはげましてくれた。キブツから帰った多くの仲間が本誌の制作に献身的な協力をしてくれた。かえりみればなつかしい思い出が、わずかの期間にあまりにも沢山ある。しかし、総括すれば、多忙の連続ではあったが、編集業務のみに忙殺され、読者方々と血の通うような密な関係を作り出す方向への行動がとれなかった感がある。畠中君が事務局スタッフに加わってくれて、だんだんと下地が固まって来た所で月刊キブツの縮小となるわけだが、ページ数だけで出版物の「価値」が決まるのではない、とヤセがまんを張ってがんばろうと思っっている。今後とも、よりいっそうの御支援をお願いする。ヒサオ

Henry Doubleday Research Association,
Bocking
Braintree
Essex
England.
(Membership: about £3.)
Suitable introductory literature: 75p plus 90p airmail or 50p seamail.)

Mr. Fukuoka,
2-201 Ohira,
Iyo-shi,
Ehime-ken,
Shikoku. (Telephone: 08998-2-8672)
